今月の窓

オランダモデルと地域活性化

最近，「オランダモデル」という活字を頻繁に見かける。オランダは高失業率や大幅な財政赤字を克服し，かつバブルとは無縁で，「制度疲労なき成熟社会」を実現してきた。我が国では景気低迷による企業収益悪化を受けて，リストラ策としてまっさきに首切りや中高年者の早期退職勧告による人員整理が行われる一方で，雇用情勢悪化に対する対応策としてワークシェアリングについての議論が活発化している。このワークシェアリングの“本場”がオランダであり，こうしたワークシェアリングを中心にオランダモデルが一般には理解されているように見受けられる。

確かにワークシェアリングについての概念的理解に大きな違いはないものの，その内容的理解については“似て非なるもの”と言わざるを得ない。すなわちワークシェアリングは仕事の分かち合いには相違ないが，その基本は人それぞれのライフスタイルに合わせた多様な就業形態を提供することにあるのである。オランダでは老若男女がいっしょになって仕事をしている姿をよく見かける。仕事に男女なり年齢なりによる固定的区別は少ない。例えば，あえてパートを選んで週３日働き，それ以外の日は本来希望する仕事への道を切り開いていくのに必要な資格取得のための勉強や，趣味等のレベルアップに時間をあてることも可能である。正社員であろうとパートであろうと時間給は同じ。正社員とパート等との違いは正社員以外には経営者の道が閉ざされているだけなのである。

これは至極合理的で現実的措置であるように受け止められるのであるが，そういう目でオランダを見回してみると，マリファナも特定の場所であれば吸引が許されている（ただし，コカイン，ヘロインはダメ）し，有名な飾り窓も想起されるのである。要は人間の欲望を規制すれば必ず裏社会が出現して違法行為が行われることになるのであるから，科学的に許容し得るものについては，一定のルールの中でこれを認めていくほうが社会はより健全性を維持し得るというのが彼等の発想なのである。「安楽死法」についても同様な位置づけができるのかもしれない。

こうした柔軟な社会システムの根底には，世界最初の市民革命を実現するとともに，あの大堤防を建設し，干拓によって国土を作り上げてきたことに象徴される勤勉性と公益性，そして確固たる信念が存在しているように感じられる。その結果としてアメリカのような利益追求型社会ではなく，経済の活性化と社会政策を両立し得る社会を構築してきたように思う。

ところで，今，我が国はあらゆる領域で構造改革が求められているが，構造を改革するに先立つ，国に対する思いを明確化していくことがまずは求められよう。なかんずく中山間等地域の荒廃は著しく，活性化のための諸施策が講じられてはいるが，地域に対する誇りを取り戻していくことが肝心で，そのためにはこれまでの経済性中心の限定された視点から転換して，地域丸ごと，農業，林業から景観，文化，歴史等に至るまで複合的に見渡していくことが必要である。そして地域住民の主体性を尊重しつつ，都市との交流をも混じえながら，これを合理的・現実的で地道な活動につなげていくことなしにはこれら地域の将来展望を切り開いていくことは難しいように感じるのである。オランダモデルが考えさせてくれることは多い。

（(株)農林中金総合研究所取締役基礎研究部長　蔦谷栄一・つたやえいいち）